国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

マクロコズム 2000.1

◎特 集　アジア太平洋青年招へい

vol. 32

(財)青少年国際交流推進センター

アジア太平洋青年招へい事業　1999年9月29日～10月13日

今年で5回目を迎えたアジア太平洋青年招へい事業は、オーストラリア、ブルネイ、カンボディア、中国、フィジー、インドネシア、キリバス、韓国、ラオス、マレイシア、マーシャル、モンゴル、ミャンマー、ナウル、ニュー・ジーランド、パラオ、パプア・ニューギニア、フィリピン、シンガポール、ソロモン、タイ、バヌアツの計22か国（106名）の青年を招へいして実施されました。都内プログラム、アジア太平洋青年フォーラム、地方旅行等を含んだ充実した15日間の滞在でした。

▲ 太田前総務庁長官を囲んで

▲ 歓迎会でマーシャル大使を迎えて

▲ オリエンテーション

▼ アジア太平洋青年フォーラムでの1コマ

地方旅行

和歌山県

▲ 緑の中でのバーベキューは格別の味

大阪市

◀ 生徒の案内で高校見学

佐賀県

▶ ホストファミリーと一緒に

北九州市

◀ 初トライ、藍染め体験

山口県

▲ 大内塗りで箸作り

課題別視察

1999年10月4日

▲ 裏千家東京事務所でお茶の体験

文化コース

▲ 折紙会館にて

▲ 新宿区立江戸川小学校で大歓迎

教育コース

▲ 新宿区立東戸山小学校　子供の笑顔は万国共通

▼ 大田区立くすのき園にて

社会福祉コース

10月4日に実施された「課題別視察」は、この他に料理コース、防災コース（「本所防災館」）を合わせ、5コースに分かれて訪問しました。青年たちは一般の観光旅行では味わえない日本を体験しました。

国際青年育成交流事業＆アジア太平洋青年招へい事業

～参加青年の声から～

事　業　名	実施時期	招へい国数	招へい人数	回収率
国際青年育成交流事業	'99.7.12～ 8. 5（25日間）	13か国	117名	100%
アジア太平洋青年招へい事業	'99.9.29～10.13（15日間）	22か国	104名	97%

今年の「国際青年育成交流事業」（以下育成交流事業）と「アジア太平洋青年招へい事業」（ア太事業）では、両事業の外国青年に同様のアンケートをとり、事業に対する評価をしてもらいました。２つの事業を比較しながら招へい事業のプログラムについて考えてみたいと思います。

〈参加動機〉

まずはじめに参加動機ですが、両事業とも「国際交流事業に関心があった」が群を抜いて第１位となっています。続いて日本の友人、外国の友人を作りたいなど、外国に対して関心の高い青年たちが来日していることがわかります。

またこれに対応する質問で「事業で得たものは？」という問いに対し、「日本やその他の国々への理解が深まった」がトップに挙がりました。このことからも参加青年の期待に十分応えていることがわかります。

〈効果的なプログラム〉

効果的なプログラムについて聞いてみると（グラフ参照）、ホームステイは両事業とも高い数字を示しています。ほとんどの青年が、受入家庭に対し感謝の気持ちを書いており、日数を延ばして欲しいという要望も多くみられました。ただし、受入家庭の事情でずっと家にいた青年たちからは、一緒に外出できるような機会が欲しかったという意見もありました。各受入家庭の事情は理解できますが、短い滞在時間でもあるので、楽しい思い出作りのご協力をお願いしたいと思います。

ホームステイに並び、「国際青年の村」「アジア太平洋青年フォーラム」など、交流型のプログラムに対する評価も非常に高くなりました。一般の観光旅行と違い、意見交換や共同作業、生活体験などが組み込まれていることが、この交流事業の醍醐味であることが実証されています。

またグラフ上では低い数字になってはいますが、

主な内容

２つの招へい事業を比較して ……5～6
アジア太平洋青年招へい事業を受け入れて…7
受入実行委員の立場 ……8
私の事後活動 ……9
特別企画「この人に聞きました」……10～12
群馬青友会 ……13
日韓青年親善交流 ……14～15
日中青年親善交流 ……16～17
日韓青少年指導者交流 ……18～19
イベント情報……20

〈表紙の説明〉

アジア太平洋青年
招へい事業1999より

2つの招へい事業を比較して

「都内視察」の必要性は強く言われており、満足度は4.2以上（不満1－満足5とし5段階評価の平均値）になっています。不慣れな東京をガイドしてくれた日本青年への印象も良いことからも、都内視察は交流というよりは買物や東京見学の添乗というプログラムの性質のため、相対評価が下がったものと考えられます。

〈全体評価と英語力〉

全体評価をみると育成交流が4.4、アジア太平洋事業が4.7とかなり高い満足度となりました。

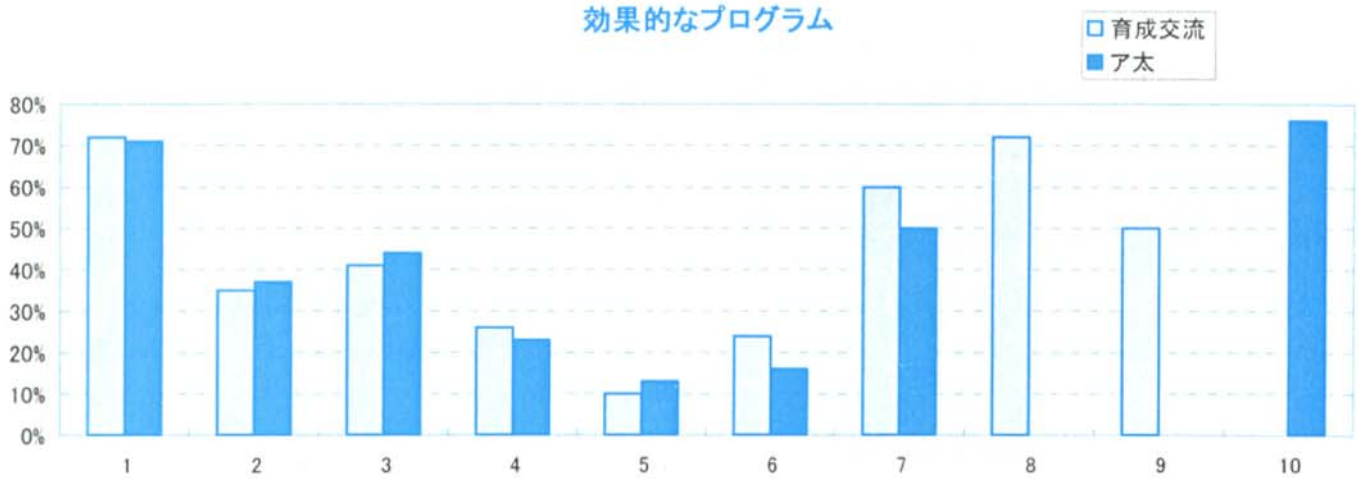
英語力の必要性については、両方とも4.6と出ています。言葉を使わない交流も可能ではありますが、先の結果からもわかったように、意見交換や共同生活に対するプログラムの評価が高かったことからも、言葉の重要性は不可欠といえるのかもしれません。

〈今後への提言〉

今後の事業への提言として次のようなものが出されました。

1．インターネットにアクセスできる環境が必要
2．プログラムにもっとゆとりを
3．スポーツ交流の必要性
4．来日前に民泊家庭やプログラムの詳細についての情報が必要

そして多くの青年たちが事業の継続を強く希望しています。育成交流事業では85%、ア太事業では97%の青年たちがこのような事業は世界平和に大きく貢献すると回答しています。この事業が世界の青年たちをつなぐ貴重な機会となっていると確認できたことで、今後もより充実したプログラムを作っていきたいと感じました。



1．ホームステイ　2．文化紹介　3．課題別視察　4．都内視察　5．表敬訪問　6．パーティ　7．地元青年との交流
8．国際青年の村（育成交流のみ）　9．国際青年交流会議（育成交流のみ）　10．アジア太平洋青年フォーラム（ア太のみ）

アジア太平洋青年招へい事業を受け入れて

北九州市教育委員会青少年課　野口　達也

1．受入まで

北九州市ではこれまで「東南アジア青年の船」など3日間程度の受入が主であり、多少窮屈なプログラムが多かった。そこで今年度は比較的期間が長く、様々なプログラムをもつ「アジア太平洋青年招へい事業」を受け入れることにした。

プログラムを組む際には、北九州市の青年団体の横断的組織である「ヤングネットワーク北九州」と相談しながら決めていった。基本的には①日本の伝統芸能の体験、②青年を中心とした地元の人との交流活動、③北九州市に来たからにはぜひ行ってもらいたい場所などを考慮して検討した。ただ、自分でも楽しめるプログラムかという視点を忘れないようにした。また外国青年の生活ペースはかなりのんびりしているのではないかと思われたので、なるべく時間にゆとりを持ち、1ヶ所での滞在時間が長くなるように心がけた。

2．食事について

最後までよくわからなかったのは、食事のことである。特に宗教上の問題があるので、どんな食事がよいのか色々と検討したが、日本に来たからには日本人が日頃から普通に食べているものを出そうと考えた。

3．当日のプログラム

①学校訪問：子供たちが思ったよりも人なつっこく青年たちにまとわりつき、青年が振り回されていたのが印象的だった。また、歓迎会の時に手作りの国旗を掲げ、国歌を流して歓迎したため、青年たちも大変喜んでいた。時間はある程度確保したつもりだったが、結局駆け足での交流になった。帰り際には、涙を流しながら手を振る子供も多く、ホームシックにかかってしまったという青年もいて、思い出に残るものとなったと思う。

②地元青年との交流：食事を兼ねての交流会にした。食事は皆で作れて日本らしいものがいいということで、お好み焼きを選んだ。英語が話せる地元青年が少ないため、意思疎通を図るのに悪銭苦闘した。終わった後、グループで夜の町に消えていった青年も多く、北九州市の夜をエンジョイしてくれたことであろう。

③ホームステイ：外国青年が期待していたホームステイは、受入の経験がほとんどない家庭が多かったにもかかわらず「病み付きになったので、来年もぜひ声をかけてください」といった声も聞かれ、青年たちも楽しんでくれたことと思う。

4．課　題

自由時間がないこと。それぞれテーマをもって来ている青年が多いので、それに対応するためには、ある程度の自由時間が必要である。ただ、5日程度では時間確保が難しいだろう。

最後に今回ご協力いただいた皆さんに感謝したいと思う。ありがとうございました。

受入実行委員の立場から

山口県アジア太平洋青年招へい事業受入実行委員長　桑原　恵美

事業を終え時々思い出して写真を見ると、青年達の輝いた笑顔があり、色々なハプニングやエピソードがフラッシュバックしてきます。今回バヌアツ、キリバス、韓国、ナウル、ベトナムの5か国の青年を迎えました。事前に地図で場所を確認して、雰囲気を感じることができましたが、受入への不安は消えませんでした。

事業の受入が決まり、私が実行委員長と決まった時から「えー」「なんでー」と叫び続けていたような気がします。幸いなことに、協力的なスタッフに支えられ、準備は着々と進み順調かと思われていました。が、事業2週間前。大型台風が山口県を直撃し、そのため山口宇部空港は水没。復旧のめどはつかず、怪しい雲行きとなりました。そこに、追い討ちをかけるように、ベトナムの不参加の知らせ。青年達との交流を楽しみにしていたスタッフ全員、肩を落としました。2週間前の出来事で、各所のキャンセルや変更するため、慌しい最中、更に2日前、1人帰国者との連絡。いよいよ私の頭の中はパニックになりました。

パニックと焦りの中、6日間どうなるのだろうという不安のまま、10月6日事業が始まりました。空港はなんとか復旧し青い秋空の下、外国青年達は山口へ到着しました。空港ゲートで満面の笑顔の彼らを見て、私の不安は吹っ飛び、山口での思い出を沢山作って帰ってもらえるよう頑張ろうと気持ちも新たになりました。

山口でのスケジュールは、小学生と一日過ごしたり、大学生とソフトバレーボールを楽しんだり、山口伝統文化の大内塗りの体験をしたりしました。また、リサイクルセンターでは、館内の見学や環境問題について話をし、その他生け花体験など青年達には、全てが目新しく楽しかったようです。特に、小学校訪問は心に残っているようで、企画して良かったと思います。青年達も「山口は東京と違い古い家や山や川があり、自然の多い所でとても落ち着き故郷のようだ」と言って山口を気に入ってくれた様子です。

ホームステイでは、県内の観光や料理作り、カラオケ等、様々な体験をしました。なかなかお別れのできないところもあり、思わず一緒に涙した場面もありました。

色々とあったアジア太平洋青年招へい事業は、多くのスタッフの協力と青年達の輝いた笑顔に支えられて、無事終了しました。事業中もハプニング続出で慌てふためくことも多々ありましたが、青年達はとても真面目で行事はスムーズに進み、一緒に楽しく過ごすことができました。

この地球には60億人もの人々が生活していますが、その中で今回出会った人達とこうして6日間も一緒に過ごせたことは素晴らしいことです。この運命の出会いを大切にして、これからも私にできる協力をしていきたいと思います。

GAISFのカルチャーボランティアに参加して

前中部ブロック幹事　醍醐　良子

2008年夏季オリンピックの招致を目指している大阪市で、10月13日～16日まで国際競技連盟連合（GAISF）の大阪総会がありました。

この総会には五輪種目をはじめ90競技のスポーツ関係者及びIOC委員11人を含む約500人が参加し「スポーツとボランティア」などをテーマとした議論が交わされました。

IOC委員を巡るスキャンダルのあおりを受けて公的な招致活動ができないため、大阪市は開催都市をソフトにアピールしたようです。開会式では雅楽や大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏などがあり、またレセプションでは、カルチャーボランティアが日舞を披露しました。

この総会には通訳などの語学ボランティア、日本文化などを紹介するカルチャーボランティア、そして大阪城案内等の観光ガイドなど約500人のボランテイアが参加しました。IYEOのメンバーも多く参加されたのではないでしょうか。

私はホテルロビー近くのOSAKAウエルカムラウンジ内の日本文化紹介及び体験コーナーを担当しました。これは会議参加者及びその家族に、日本の四季の花を押花にしたハガキを製作していただくというもので、そのハガキを隣接した臨時の郵便局から大阪の記念切手を貼って母国に出している人もいました。

また急きょ担当することになった書道のコーナーでは、外国の皆さんに「OSAKA」「おおさか」「大阪」を書いていただき、その後私がゲストの名前を適当な漢字に当てはめました。これはいつも外国の方に喜んでもらえます。

他のボランティアの人たちとゆっくり話をする時間がなかったのが残念ですが、皆さんとても生き生きと活動をしていたのが印象的でした。

これからも大阪市には北京やパリなどの有力ライバルを相手に、ぜひ招致に向けて頑張っていただきたいと思います。

◀ 押花の実演指導

特別企画「この人に聞きました」

すべての世代でつくろう ふれあい社会

さわやか福祉財団渉外代表
和久井　良一

Q：はじめに「さわやか福祉財団」の活動内容について教えてください。

この「さわやか福祉財団」は、8年半前に堀田力氏が法務省官房長を退官後に創設した「さわやか福祉推進センター」がその前身です。もともと日本には地域の中でお互いを助け合う心はあったのが、経済成長の中で崩壊してしまった。高齢社会を目前に控え、その疲弊してしまっているシステムの再構築と、個人の自立・プライバシーを尊重しながら新しいふれあい社会を作っていこうというのが私たちの基本理念です。

この理念の下、私達の活動は大きく3つ挙げられます。まず1つは***組織づくり支援事業***として、地域の高齢者福祉在宅サービスサポートシステムを作ることです。これは行政主導ではなく住民自身が、地域の中で高齢者をサポートできるような団体を作る支援をします。具体的には団体設立のための相談にのったり、地域内で似たような活動をしている団体同士のネットワークを作っています。また各種リーダー研修会や、支援インストラクターの養成などの活動を行っています。

2つ目は***社会参加システム推進事業***で、学校教育へのボランティア体験学習の導入や社会人がボランティアに参加しやすい制度の推進をしています。学校＋家庭＋地域（ボランティア）という関係ができることで、地域の教育力が注目されています。特に地域にある様々なボランティア団体が参加することで、地域の教育力をアップさせていくことが可能になると思います。1と2を進めていくことで、市民組織5,000団体、担い手1,200万人を目標としています。

この他の活動としては、***広報・企画事業***として『さあ、言おう』をはじめとする各種の刊行物を発行し、様々な意見を収集、発表の場として活用しています。

Q：1999年は「国際高齢者年」でしたが、この1年を振り返っての感想をお話しください。

国内において高齢者に関わっている団体は、介護や生きがい、年金、就労など実に様々です。しかし、これまでこれらの団体を連携させるネット

ワークが存在しませんでした。それがこの「国際高齢者年」をきっかけに「高齢者年 NGO 連絡協議会」(以下高連協) が結成されたことは大きな成果だったと思います。この高連協には 39 団体が加盟し、3 つの部会に分かれて活動を展開してきました。まず情報部会では、これまで日本は情報はもっているが情報発信はしていないと指摘されていたのを受け、IFA 総会 (International Federation on Aging) にて日本の民間団体の活動報告 "Japan Aging and NGO Activities" を発表し、高い評価を得ました。

また憲章部会では、「すべての世代でつくろうふれあい社会」というスローガンをつくり、「高齢者憲章」を発表しました。ここでいう「すべての世代」は国連のスローガンにも連携しており、たまたま私達は「高齢者」が入口でしたが、高齢者に優しい街は障害者にも優しく、子供にも優しいはずです。そういう意味でも自然と「すべての世代」が対象となるふれあい社会を作ろうとスローガンを掲げました。また「高齢者憲章」では尊厳、社会参加、社会貢献、健康づくり、まちづくり、社会保障制度、生涯学習の具体的な提言を盛り込み、特に社会保障制度については、利用者は費用の一部を負担するとともに、その自己決定権は最大限に尊重されなければならないことを強調しています。何でも行政が面倒を見てくれるのではなく、自立の意識を盛り込んだことが特徴です。

私自身はイベント部会長として活動してきましたが、ここではイベントマップの作成に力を注ぎました。これは各団体の年間スケジュールを一覧表にまとめるもので、イベントの中には 10 団体以上が参加する合同企画もいくつか生まれ、より充実した内容になったと思います。

1 年間を振り返ってみると個人的には「大変楽しかった」というのが率直な感想です。この活動を通じてお互い顔がわかるようになり、今まで以上に広いネットワークをつくることができました。実はこの高連協は 1 年限りの期間限定で始められたものでしたが、多くの仲間が継続を希望しています。今後も情報交換の場として、連携・協力体制を強化してつなげてきたいですね。またその活動としては「高齢者憲章」を、各団体の自主性を大事にしながら、日本の社会の中に具体的に生かしていきたいと思います。更にその先を言えば、将来的には政策提言をしていけるような団体になっていければとも思います。そうすることで、その団体の存在意義がより明確になってくると思うのです。アメリカでは既に高齢者のための団体が大きな力をもって存在しています。日本もこれからは行政や政治家だけでなく、NGO など民間団体の参加によって発展していかなければなりません。

▲ 情報誌『さあ、言おう』

Q：これからの日本の高齢社会を取り巻く環境はどのように変化していくのでしょうか。

今、日本の高齢者を取り巻く環境は大きく変化しようとしていると思います。例えば「介護保険」ですが、高齢者が安定した生活をするためには①「身体の安心」②「心の安心・日常生活の安心」がなければならないと思うのですね。この中で介護保険は「身体の安心」については保障していますが、残りについてはわずかな生活支援のみで、まだ追いついていないのが現状です。特に②については地域の支援が不可欠となっていくだけに、さわやか福祉財団でもこの点について、地域の助け合いシステム作りに力を注いでいます。加えて介護を必要としない元気な高齢者への生きがい作りについても、高齢者憲章の中で社会貢献をしよう、健康作りをしようという形で呼びかけています。この介護保険はまさに地方分権の第一歩と言えると思うのです。これは日本のシステムを変える大きな起爆剤になる可能性を含んでいます。最近感じるのですが、今日本が動き始めているような気がします。介護保険が生まれたこと、NPO・NGOが台頭してきたことが行政主導ではなく、市民が動き始めるそんな予感がしています。このように社会システムを変えるというのは時間がかかるものです。自分の子供の代、孫の代を心豊かな日本社会にするためには、今から行動を起こさなければならない。だから先にも述べたように「すべての世代」が絡んでくるわけですね。

Q：和久井さんご自身と「さわやか福祉財団」の出会いは？

私はこれまで典型的な企業人間でしたが、たまたまある銀行の経営懇談会に出席したとき、堀田さんが講演をしていたのですね。そこで「ふれあい社会」の話をされていたのですが、その話が自分の子供時代に、田舎のおじいさん、おばあさんや村の人々に育てられた感覚が良かったなという気持ちにぴったり当てはまるような感じがしました。その後定年直前にこの財団の事務所を訪れ、何か手伝えることはないかと門を叩いたのが始まりです。

根っからの企業人のため、もちろん活動をする中で戸惑いはありました。でも企業人だからこそ持っているマーケティング感覚、コスト感覚、人材把握はここでも活かせているのではないかと思います。それに会社にいた時から現場主義でしたから、ボランティアで福祉サービスをされている多くの人々と出会い、その人々の地域への思いや行動に感動し、この人たちのために何かをしたいという気持ちは強いですよ。堀田さんはこれからの日本のオピニオンリーダーだと思います。その思いを形にしていくためにもこの「さわやか福祉財団」の実績を積み、様々な提言をして日本を変えていきたいですね。

和久井良一氏のプロフィール

和久井良一（わくい よしかず）

1932年6月6日生。栃木県出身。慶応義塾大学法学部卒業。1956年横浜ゴム株式会社入社。1975年シーアイ化成株式会社取締役、同常務取締役を経て1994年退社。同年よりさわやか福祉推進センター（前身団体）のボランティア参加を始める。1996年同財団の社会参加システムグループリーダー、1997年より渉外代表として活躍。その他、文部省、東京都、品川区をはじめとする各種委員会の委員を務め、現役時代の企業人生活以上に多忙な日々を過ごしている。趣味は水泳、茶道。

群馬青友会40周年記念大会

群馬青友会長　　岡村　和代

平成11年11月21日、私達役員はこの日のために1年前から会議を持ち始めた。まず何をするか？最悪の場合を考慮して、なるべくお金がかからず、スタッフが大勢でなくても開催でき、ちょっと厳かな記念式典、ためになる記念講演、楽しい記念パーティを行い、思い出の詰まった記念誌を発刊することになった。

全てを群馬青友会らしくしたいため、講演者はしっかり活動していて、聞き手にも今の自分は何をしたいか、何ができるか考えるきっかけになる話をして欲しかった。そこで無名ではあるが、母国カンボディアで人々が自力で生活をしていけるようにするため、国有地を借り、地雷撤去から始めて畑に変えていく活動をしている、群馬県在住のオク・ビチェイ氏にお願いすることになった。

今回の大会を行うにあたり、私の一番の希望は多くの会員に準備から関わってもらうことだった。「世代交代」といって離れてしまうのではなく、新旧共に派遣時の気持ちに戻ってほしかった。とはいえ全員で集まるわけにもいかないので、派遣が始まった昭和34年より、また県派遣は昭和46年より各年度の代表として一人ずつ当時を語っていただき、これを写真入りで記念誌にすることで、事業の移り変わりがわかるようにした。

記念式典前のアトラクションには、青友会員も活躍している八木節の会で、華やかさを加えた。記念パーティは、楽しく盛り上げながらも、歓談の邪魔にならないように、群馬県ビンゴゲームをした。大きい地図に次々と市町村名を引いて貼っていくのだが、思った以上に好評だった。

反省点としては講演者選びが難航し、決まったのが9月だったため、出席案内通知が遅れてしまったことだ。また、会員全員の現住所を把握していないため、発送は必要最小限にし、新聞・ラジオで告知してもらえるよう後援依頼をした。あとは仲間同士の呼びかけを役員がしていった。

出席人数は決して多くはなかったが、参加して下さった誰もが40周年を迎えられたことを喜び、和やかな雰囲気で大会を終えられたことで、私達が頑張ってきた1年が意義のあるものとなった。協力的なスタッフに支えられて実行委員長の大役を果たせたことに深く感謝している。

これまでの参加者が、毎年活動を続けてきたことから今の群馬青友会が存在する。そして現会員の行動こそが、明日の青友会を作っていくことを忘れてほしくない、ということで群馬青友会と40周年をアピールするため、有志が10名県民マラソンに参加した。10kmはきつかったが、ここでもまた達成する喜びを得られた。

40周年記念大会を行うことで、改めて仲間の大切さ、ありがたさを認識でき、新たな可能性をもつ自分を発見できた。大変ではあったが、得るものも大きい大会だった。

◀記念パーティの群馬県ビンゴゲーム

韓国派遣事業に参加して

平成11年度派遣団員　中島　仁

韓国というと地理的に非常に近い国で、気軽に行けるというイメージがある。また、地理的にだけではなく、歴史的にも日本とは非常に縁が深い国であることは誰もが知っていることだろう。勿論、よい意味でも悪い意味でもということだ。これほど近い国であるなら、今更このような派遣事業は必要ないという意見もあるかもしれないが、近いからこそこのような交流事業に意義があるのであって、それだけに、この韓国派遣事業は他の派遣事業とは多少違った色彩を帯びているといえる。

今回の韓国派遣は15日間という、航空機派遣の中では最短の日程、そして39名という最大の団員数で行われた。この限られた時間の中で団員一人一人が、数多くの経験をし、成長して帰国したことは間違いない。また、個人旅行ではなく、団体での公式な訪問であるが故に感じることができたことも多かったであろう。

自分自身について言えば、韓国青年との交流が一番印象に残っている。この交流は韓国の東北に位置する平昌という所で、2泊3日で行われた。期間中、サッカー、バレーボールなどのスポーツをしたり、お互いの出し物を発表しあったり、夜には一つの部屋に集まり心ゆくまで話をしたりした。日韓青年合わせて80名ほどで行われたが、数の多さも手伝ってか、どのプログラムも非常に盛り上がり、充実した時間を過ごせたと思う。

◀美しいチマ・チョゴリ（筆者中央）

日本人と韓国人は非常に仲良くなれる。これは間違いない。他の外国にいても、アジア人同士仲良くなりやすいという話もよく耳にする。ただこの過程で、避けて通れない話題がある。両国の歴史の認識についてである。具体的に言えば、36年間に渡る日本の植民地支配について、延いては豊臣秀吉の朝鮮出兵にまで話は遡る。これを知らない韓国人はいないといってもいい。

「反日感情」という言葉がある。今回話をした青年の一人が言っていたことだが、その人は日本人は好きだし、日本の技術や文化の中から学ぶものは非常に多いが、日本という国は好きになれないと話していた。また、いくら昔のことで自分に直接関係がないといっても、そのような歴史教育を受けてきたので、自分でわかっていてもその感情はどうしようもないとも言っていた。それだけ彼らにとって歴史の問題というのは重要なことなのである。それに比べると日本人の歴史認識は甘いと言わざるを得ない。何もここで、日本が今までにどれだけ悪いことをしてきたのかを知り、反省しろと言っている訳ではない。韓国（朝鮮）との歴史について言えば、友好的な関係を保っていた期間の方がはるかに長いのである。自分を含め日本人は、まず両国間の歴史を当時の国際的状況と合わせ、感情抜きの事実として認識することが

大切であろう。そして、これからの両国間の関係発展のために尽力していくべきである。そうすれば、「反日感情」という言葉という言葉を耳にする機会も少なくなっていくだろう。

今回の訪問は、そういったことを改めて考えるよい機会になったと思う。これは僕たちに残された大きな課題である。今後も試行錯誤しながらでも、自分なりの結果を残していけたらと思う。最後に、この文章が、みなさんが日本と韓国の関係について考えるにあたってのきっかけになってくれれば幸いである。

20代が中心の日韓青年親善交流の招へい青年は、終始、明るく和気あいあいとした雰囲気のグループでした。各地の受入でも活発な異文化交流が行われ、21世紀の日韓関係に明るい未来が期待できました。

〈韓国招へい青年　国内滞在日程表〉

月　日	プログラム	滞在地
11月3日(水)	来日	東京都
11月4日(木)	オリエンテーション 青少年行政について講演 事務次官表敬 神田外国語大学 事務次官主催歓迎会	東京都
11月5日(金)	新宿区立落合第三小学校 新宿区立富久小学校 東京都庁舎	東京都
11月6日(土)	さいたま新都心 オリエンテーション 県営サッカースタジアム ㈱東玉	埼玉県
11月7日(日)	高麗神社・聖天院 ㈱埼玉種畜牧場 狭山大茶会 サピオ稲荷山 地元青年との交流会	埼玉県
11月8日(月)	ロッテ狭山工場 立教高等学校	埼玉県
11月9日(火)	埼玉県副知事表敬 京都へ移動 歓迎会	京都市

月　日	プログラム	滞在地
11月10日(水)	防災センター 伝統産業ふれあい館 平安神宮 京都市副市長表敬	京都市
11月11日(木)	グループ別視察 地元青年との交流会	京都市
11月12日(金)	山形県へ移動 山形県庁表敬 交歓会	山形県
11月13日(土)	〈米沢市グループ〉 高畠ワイナリー ホームステイ 〈余目町グループ〉 羽黒山 五重塔 ホームステイ	山形県
11月14日(日)	ホームステイ	山形県
11月15日(月)	東京へ移動	東京都
11月16日(火)	皇居見学 グループ別視察	東京都
11月17日(水)	帰国	

中国に29人の足跡を

平成11年度中国派遣団　武次　和子

「花心」を歌うたびに今回の中国派遣のことを思い出す。派遣の目的である親善交流を通して、数多くの人と出会い、共に語り合い、歌った中国での19日、日本での9日間だった。今回の訪問地は、北京、銀川、西安、杭州、紹興、上海だった。北京、上海のような都市もあれば、イスラム教を信仰する自治区の銀川、歴史を持つ西安、景観の素晴らしかった杭州、魯迅などの文化人を輩出した紹興、やはり中国は広く、様々な顔を持っていると感じた。

建国50周年を迎えた中国は、大変賑わっていた。北京では、万里の長城をはじめとする視察や表敬訪問をした。北京でのハイライトは合宿討論会だったであろう。北京外国語大学の学生とスポーツ交流をし、夜には共に料理を作った。私達は餃子を習い、たこ焼きとすき焼きを教えた。交歓会では、阿波踊り等を楽しみ、文化交流から輪が広がっていくと感じた。翌日の討論会では、これからの日中関係、環境問題、教育問題、異文化理解、コンピュータについて熱い議論が交わされた。

ちょうどこの日は日中国交正常化27周年の日であり、中国の学生と共に迎えることができた。中国では幾度となく次のような言葉を耳にした。「青年は未来であり、国の希望である。次世代を担う若者たちの活躍を期待する。過去を総括し世紀にまたがる交渉を」。この言葉の通り、一つ一つの交流が「掛け橋」であり、個々人がその意識を持つことが大切であると感じた。

銀川では、その歓迎ぶりに優しさと暖かさ、日本への期待を感じる。ここは中国人もあまり行ったことがないという。国慶節の日、モンゴル舞踊を見て、団員と一緒にお祝いできたことは、最高の思い出となった。日本語を一生懸命学ぶ学生達と出会い、自分の語学力のなさを痛切に感じた。と同時に、これからの目標がもてた。「中国は広いから一生に一度しか会えない人もいる」という言葉を銀川の学生から聞いた時、私はとても悲しかった。私は銀川の人々と別れを告げるのが辛かった。「再見」と言う言葉を交わしながら心の中でこう思った。「中国語の「再見」は、さようならではない。また会えるという意味なのだ」と。

西安、杭州、紹興、上海でもたくさんの体験を

◀建国50周年記念展示会にて（北京）

◀万里の長城にて

した。方言があって、意思疎通に戸惑ったホームステイ、小学校訪問、児童福利院や、企業見学など、それぞれの場所で日本との違いを考え、中国の実態を知ることができた。

今回の派遣にこの29人のメンバーと参加できて良かったと心から思う。また、中国で私達を受け入れてくださった方々に厚く感謝したい。

この経験は、私に中国という偉大な大陸への更なる興味を与えてくれ、自分自身の成長にも繋がったと思う。この派遣を始まりとして、これからの活動に活かしていきたい。

日中青年親善交流事業の招へいで、中国からの青年団29名が来日しました。各訪問地では、9月下旬から中国を訪問した日本青年の熱い歓迎を受け、さまざまな交流プログラムを展開しました。大阪でのホームステイも日本文化を知る良い体験となったようです。

〈中国招へい青年　国内滞在日程表〉

月　日	プログラム	滞在地
11月10日（水）	来日 歓迎会	東京都
11月11日（木）	オリエンテーション 国会議事堂 総務庁長官表敬 大臣主催　歓迎会	東京都
11月12日（金）	新宿区立四谷小学校 新宿区立鶴巻小学校 （1校訪問） 日本体育大学相撲の授業見学	東京都
11月13日（土）	さわやか千葉県民プラザ モラロジー研究所訪問・交流	千葉県
11月14日（日）	県立房総のむら 国立歴史民族博物館	千葉県
11月15日（月）	幕張メッセ 千葉市立打瀬小学校 千葉県庁表敬	千葉県
11月16日（火）	神戸市へ移動 歓迎レセプション	神戸市
11月17日（水）	神戸製鋼所 神戸総合技術研究所 農業公園 孫中山記念館 明石海峡大橋	神戸市
11月18日（木）	震災復興記念館 港務艇「おおわだ2」乗船 神戸市役所表敬	神戸市
11月19日（金）	大阪府表敬 海遊館 ホームステイ	大阪府
11月20日（土）	ホームステイ	大阪府
11月21日（日）	ホームステイ 交歓会	大阪府
11月22日（月）	沖縄県表敬 歓迎会	沖縄県
11月23日（火）	県南部視察 グループ別視察	沖縄県
11月24日（水）	沖縄県立那覇西高等学校 県立石嶺児童園 ぶせなサミット会場 海中展望塔	沖縄県
11月25日（木）	那覇市伝統工芸館 東京へ移動	東京都
11月26日（金）	東京ディズニーランド視察 総務庁次長主催　歓送会	東京都
11月27日（土）	グループ別視察	東京都
11月28日（日）	帰国	

そうだ、キモノにしよう

平成10年度ジンバブエ派遣団員　大地　裕子

時代の流れに逆らって、私は着物を着るのが好きだ。着付けは少し面倒だが気分が変わるし、長い時間正座をしても疲れない。しかし絹物は、たえず汚さないようにと気を使う。だが、最近あるパーティで出会った魅力的な女性は、ドレスのような着物を着ていた。尋ねてみると、それは二部式で帯を締めない現代キモノだった。その後、呉服屋の名残のある小さな店で、ポリエステル製のそれを見つけたときは、まさに珠玉をつかんだような心地がした。

「遠くて近い」という形容詞のついてまわる韓国は、失礼ながらこれまで全く旅行先の対象となることがなかった。というのも「ショッピング＆グルメツアー」と言われても、ブランドものにも興味がないし、焼肉・キムチは自分からすすんで食べたいものではないからだ。まして先の大戦の心情問題が根強く残る隣国に行くことは「飛んで火に入る夏の虫」のように思えて、気が進まなかったのが正直なところである。

しかし、今回は「日韓スタディツアー」である。私のように苦手意識の強い者にとってはこれを逃すと一生の悔いになると思った。偶然にも今年は、様々な交流会の場で韓国青年と知り合ったことも、ツアー参加に踏み切るきっかけとなった。

言葉の通じない国に行くと、つい口数が減ってストレスをためこみ、せっかくの旅行が台無しになってしまうことがある。今回は８人の仲間と同行するというから、その点は心配なかったが、ハングルの弾まないであろう会話に替わって、何か自分を表現できるものが欲しかった。「そうだ、キモノにしよう」。韓国も日本同様に、普段着は洋服になっていることは知っていたので、この際ちょっと目立ってしまおうと思った。それに現代キモノはたたむと驚くほど小さくなるので、身軽な旅にはうってつけだ。

11月初旬の韓国は銀杏の葉も落ちる頃で、暖かい初秋を過ごしてきた身には少し肌寒く感じられたが、天気は安定していて足元を心配することもなく過ごすことができた。ツアーの仲間に「ミスキモノ」とはやしたてられ、滞在中は日程のほとんどをキモノ姿で通すことになったのだが、あらためて民族衣装の魅力に目覚めることとなった。

そろそろキモノを着るのも飽きてきた頃、チマチョゴリを着る機会がやってきた。あのふわっとした衣装は、色彩・形・素材と見るからに着物とは随分違っている。ワンピースのように頭からかぶるものだと思っていたら、胸から上の服と大きなスカート部分に分かれていた。長いリボンを胸のところで引き絞ると、それなりに格好ができあがった。両手を前で組み、頭を支えるようにしてそのまましゃがみ込んでいく正式なお辞儀は、長いスカートを踏みそうでなかなか大変だった。

衣食住の２番目は「食」だ。恥ずかしながら、石焼ビビンバの具の下から白いご飯が出てきたときには、アレアレという感じで、本場のキムチの辛さには涙ものだった。こんな韓国ビギナーにも、２日目にはあつあつ参鶏湯（サンゲタン）、さっぱり水キムチ、露店の名物餅トッポッキなど、真っ

赤なキムチだけではないこの国の奥深い食生活に胃腸もほっと一息ついた。韓国海苔といえば、油でべとべとしているものと思ったが、あれも家庭やレストランでゴマ油を使って焼いていることも知った。また味覚の秋を満喫するかのようにホームステイ先のお母さんは、食後は必ずといっていいほど果物を出してくれた。みかん、柿、梨といったお馴染みの果物はどれも完熟で美味しかった。

最後は「住」であるが、大都市ソウルはもちろん、地方都市でもアパートに住む人が大多数で、日本のような土地信仰の思想はなく、合理的な暮らしを選んでいるようだった。一般のホテルは、絨毯敷きにベッドの部屋だが、一般住宅のような床暖房（オンドル）付の部屋もたいてい用意されているようだ。ホームステイではこの暖かい床の上に、布団を敷いて休んだが、普段から畳に布団の暮らしをしている者には安心感があった。

もっと早く行っておくべきだったのか、いや今まで待った甲斐があったのか、初めての韓国旅行は、大満足の７日間だった。韓国の受入側の皆さんにお世話になったのはもちろん、ツアーメンバーにも恵まれ、まさに抱腹絶倒の毎日を送ることができた。日韓関係についての宿題もたくさん持ち帰ってきたし、発音の似ているハングルにも興味がでてきた。ともかく、禁断症状の出ないうちに、またひょいとお隣さんに行ってきます。

月　日	プログラム	滞在地
11月２日（火）	出発	ソウル
11月３日（水）	文化観光部 国立中央博物館 ソウル市内視察	ソウル
11月４日（木）	慶州へ移動 慶州文化圏視察 慶州ナザレ園 韓日青少年親善交流会	蔚　山
11月５日（金）	清州へ移動 ホームステイマッチング	清　州
11月６日（土）	学校訪問 韓日文化交流	清　州
11月７日（日）	独立記念館 歓送会	ソウル
11月８日（月）	帰　国	

▲ 韓服を着て

▶メンバーのレストラン前で

イベント情報

今年度の各事業報告会が下記の日程で企画中です。来年度の概要についても説明コーナーがありますので、興味のある人にもぜひ声をかけてください。(参加費無料)

国際青年育成交流 日中・日韓青年親善交流	世界青年の船	東南アジア青年の船
2000年2月6日(日) 12:30～16:30	2000年2月11日(金・祝) 12:30～16:30	2000年3月19日(日)
国立オリンピック記念 青少年総合センター 「国際会議室」	国立オリンピック記念 青少年総合センター 「国際会議室」	国立オリンピック記念 青少年総合センター

申込先：下記までFAXまたはハガキで。参加希望事業名を必ず明記してください。

㈶青少年国際交流推進センター　「○○報告会係」
〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町2－35－14　東京海苔会館6階
TEL：03－3249－0767　　FAX：03－3639－2436

編集後記

2000年を迎え、なぜか気持ちも新たになります。年内に事業のほとんどが終了したため、事務局も1月～3月は比較的余裕をもって、仕事ができそうです。といいつつ、この間にいままでずっと後回しにしてきた「大掃除」をしなければと重圧も感じている今日この頃…。

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM(マクロコズム)　1月号　Vol.32　2000年1月1日発行(隔月発行)
編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2－35－14
TEL　03－3249－0767
FAX　03－3639－2436
e-mail LDP04056@nifty.ne.jp
URL　http://www.iic.or.jp/iyeo
編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　　価：198円(本体189円)
印 刷 所：株式会社　絢文社
TEL　03－3959－3960

日本・韓国青年親善交流事業（韓国青年招へい）

1999年11月3日～17日

韓国から39名の青年たちを迎えて実施された本事業は、埼玉県、山形県、京都市を訪問し各地で温かい歓迎を受けた感動の15日間でした。

▲ 埼玉県狭山市のお茶会で

▼ 埼玉県「立教高校」の英語の授業で

埼玉県

▶ 招へい団の韓団長

京都市

▲ 京都市での歓迎会で

◀ 山形名物りんごの皮むきレース

山形県

日本・中国青年親善交流事業（中国青年招へい）

1999年11月10日～28日

今年度の本事業は29名の青年を招へいし、千葉県、神戸市、大阪府、沖縄県へ訪問しました。各地での様々な体験を通じ、充実した日中交流事業でした。

▲ 続総務庁長官表敬

◀ 千葉市立打瀬小学校を訪問

▲ 千葉県幕張メッセにて全体写真

▲ 日本体育大学にて相撲の授業見学

◀ 大阪府での歓送会
女性は浴衣姿、男性はハッピを着て